小堤要害城跡調査報告書

—第Ⅰ郭土塁状遺構に関する発掘調査の概報—

1978

小堤要害城跡調査団
千葉県中世遺跡調査会

Ⅰ　調査の経緯と組織

1．本書は、千葉県山武郡横芝町所在に所在する中世戦国期の丘陵式城郭である「小堤要害城跡」の第Ⅰ郭土塁状遺構に関する発掘調査の概報である。

2．小堤要害城跡の所在する台地一帯は、昭和47年以降、土砂の採取場として買収され継続的に土取工事がおこなわれ、城跡遺構の$\frac{2}{3}$が破壊されるに至った。その間、土屋源吾を団長とする「小堤要害城跡調査団」の緊急調査は3次に亘るが、調査の結果、その遺構は高谷川の支谷によって形成された標高35mの舌状台地先端部に展開し、土塁・空堀・櫓台・腰曲輪などの防禦施設を備えた、総面積18,600㎡の典型的な中世城郭であることが確認され、その保存が望まれていた。

3．昭和53年4月、残存する第Ⅰ郭（小堤字下宮台791番地、1346㎡）が日新商事有限会社の土砂採取場として買収され、その遺構部分は大幅な現状変更を余儀なくされるに至った。横芝町教育委員会では、千葉県教育庁文化課に遺跡の取扱いについて照会すると共に、地元関係者・行政当局との協議を重ねた結果、記録保存のための遺跡地測量と発掘調査を実施することとなった。

4．発掘調査は、県教育庁文化課の西山太郎文化財主事の指導のもとに、小堤要害城跡調査団の第4次事業として、昭和53年5月15日から同23日にかけて実施した。その際、日新商事の関係者各位から格別の御配意と御協力をいただいた。

尚、調査会（団）の編成は下記の通りである。

＜調査会＞

理事長　小高猶次（横芝町教育委員会教育長）
理　事　土屋源吾（小堤要害城跡調査団長）
〃　　畠山清一（日新商事代表取締役）
指　導　西山太郎（千葉県教育庁文化課主事）
渉　外　斉藤　博（横芝町教育委員会主事）

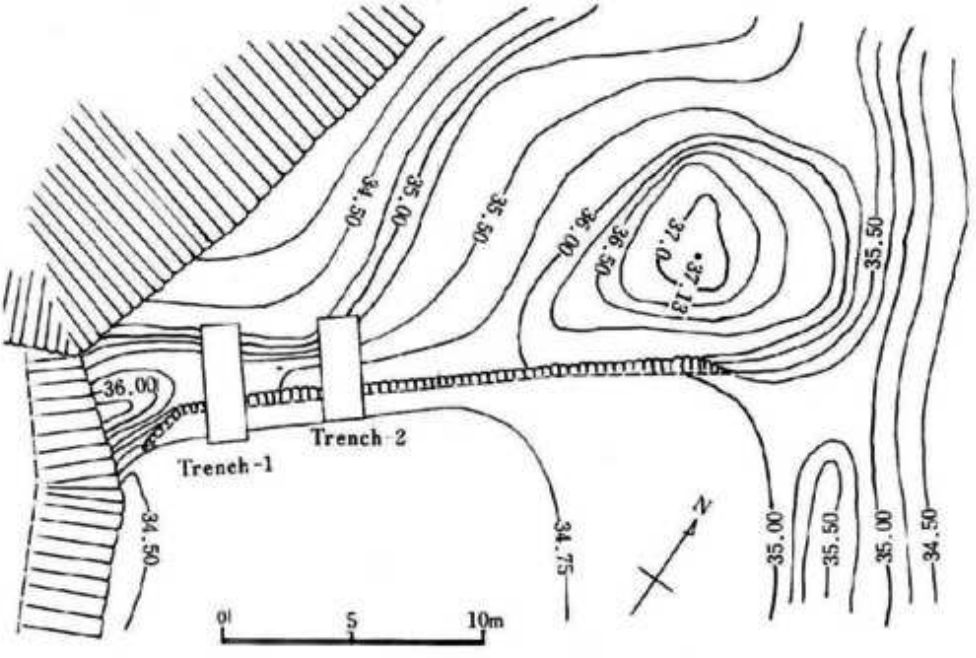
＜調査団＞

団　長　土屋源吾（横芝町文化財審議委員長）
主　任　伊藤一男（千葉県中世遺跡調査会代表）
測　量　伊藤迪彦（伊藤測量事務所々長）
補助員　伊藤正道（日新商事役員）
事務局　伊藤愛子（日新商事社員）

5．本書の執筆は各々担当の分野を分担した。すなわち、調査主任の伊藤一男は城跡北端部の土塁状遺構の発掘調査を実施して、その構築状態を確認・記録した。また伊藤迪彦は遺跡台地の測量を実施し、$\frac{1}{100}$・$\frac{1}{500}$の地形を作成して、その一部を本書に収載すると共に、原図は横芝町教育委員会で保管することとした。

＜調査日誌抄＞

5月3日～対策打合会議（於県教育庁）
5月9日～遺跡地の試掘調査（西山氏）
5月15日～調査地区の草刈作業
　　測量用の杭打ち作業
5月16日～測量作業開始
5月19日～測量作業終了
　　土塁BにTrench－1を設定
5月20日～Trench－1の計測・写真撮影
　　Trench－2を設定
5月21日～Trench－2の計測・写真撮影
　　遺構図作成のための実測作業開始
5月23日～実測作業終了
　　報告書作成打合会議（日新商事）
5月24日～印刷所との交渉など



第1図　遺跡地形図

Ⅱ　土塁の発掘調査

〔1〕調査区の概要

小堤要害城跡の第Ⅰ郭は、すでに郭内および土塁A（大手側土居）が削平されており、曲輪平坦部の攪乱深度は50～60cmにも及び、土塁B（北側土居）・櫓台址も著しい破壊を受けていた。第4次調査の対象である土塁Bは、表面観察では延長21m、幅員 150 ～ 350 cm、比高 150 ～ 200cmで、その主軸方向はN-79°-Eを測る。曲輪北隅の土塁B・C交叉部には櫓台が設定され、上部平坦部9.5m ×8m、比高2.5m（単独標高37.13m）を測る。

土塁Bの構築状態を観察するための調査区は、破壊の比較的少ない地点を選び、西端部の土取崖面から約4.5m の位置にTrench－1（150cm×450cm）、さらに3mの間隔でTrench-2（150cm×400cm）を設定、発掘調査を実施した。

〔2〕構築状態

Trench－1の土塁断面（西壁）の法量は、基底部幅員440cm、頂部幅員170cm、比高110cmを測り、その堆積状況（土層構成）をみると、まず地山面上に粘性の強い褐色土（3f・3g）を張って、さらに硬質の黒色土（5a・5b・5c）をほぼ水平に積み上げ、土塁基部を形成している。さらに黒色土層の上には、やや粒子の粗大な　褐色土（4a・4b・4c）を芯土

Trench -1

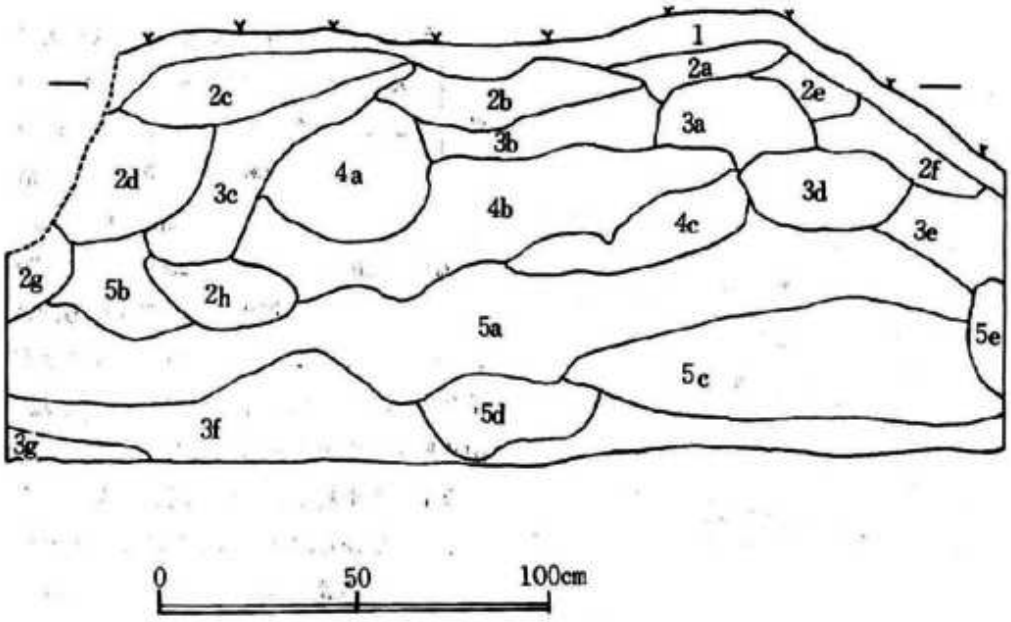
Trench -2

として15°～25°の傾斜角で、褐色土（3a～3e）、暗褐色土（2a～2h）、黒褐色腐植土（1）の土層を、約60cmのレベルの間に5層積み上げ土塁を構築している。その上部は表土下40～60cmの範囲に樹木や篠竹の根が侵入して、土層断面の第1層～第3層は非常に脆く、特に外側傾斜部の2e・2f・3b・3e・5eの各層は樹根の攪乱による層序の変形が著しい。基部の黒色土層は、部分的に褐色土が混入しているが非常に硬く、断面はよく施工当時の層序を保存していた。

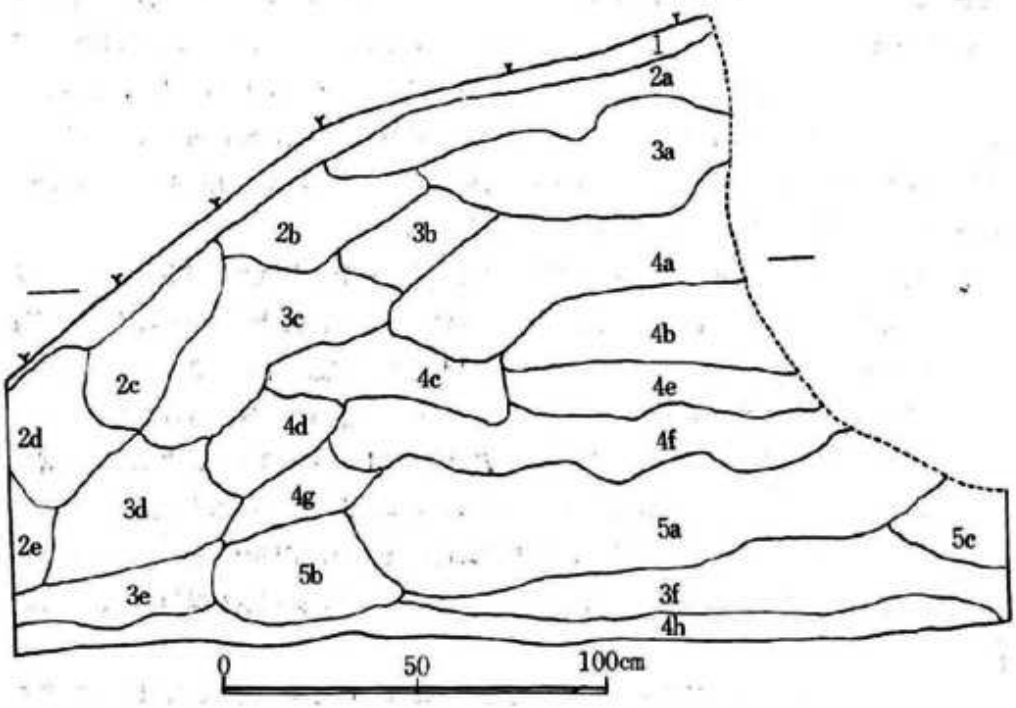
Trench－2の土塁断面（東壁）の法量は、基底部幅員250cm、比高160cmで、郭外平坦部への傾斜角（外法）は約40°を測り、郭内側$\frac{1}{3}$の欠損がおしまれる。その土層構成は、基本的にはTrench－1と同じ様式であるが、地山整形後、やや粒子の粗大な明褐色土（4h）をほぼ水平に張って、さらに粘性の強い褐色土（3e・3f）と硬い黒色土（5a・5b・5c）の互層を積み上げ、土塁基部（約40cm）を形成している。さらにTrench －1と同じく軟質の明褐色土（4a～4g）を芯土として、褐色土（3a～3d）、暗褐色土（2a～2e）、黒褐色腐植土（1）の土層を、約100cmのレベルの間に7層積み上げて土塁を構築している。Trench －2における樹根の侵入は表土下120cmにも及んでおり、特に第1層～第4層の攪乱が著しく、郭外側の傾斜部は層序が極めて不鮮明である。

〔3〕包含遺物

土塁Bの封土中に包含される遺物の多くは、縄文式土器の極細片が主体であり、Trench －1およびTrench －2からの中世遺物の出土は皆無であったが、Trench －2の北端から常滑・染付等の近世陶器の破片が若干検出された。



第2図　Trench -1 測図



第3図　Trench -2 測図

Ⅲ　築墨技法の検討

土墨A断面

第３次調査では第Ⅰ郭の細部に亘る測量作業を実施したが、東西36m・南北58mの曲輪の３面をめぐる土墨の中で、大手側の土墨Aが最も堅固であった。発掘調査の結果、土墨Aの断面法量は基底部幅員（敷）575cm、頂部幅員（馬踏）250cm、比高300cm、外法42°、内法30°で、その主軸方向はN-20°-Eを測って延長29.5mに及ぶことが確認された。その土層構成を観察すると、地山整形後、黒色土・褐色土の互層を水平に積み上げて土墨基部の平坦面を形成し、その上に芯部から法面の斜度を計算し盛土しているのが特徴である。これは、土質の保水性と排水性を巧みに利用して、粘質土と砂質土の互層を版築工法で積み上げた、二段築造の「敵土居」の作事であるものと理解される。第４次調査の土墨Bも同様に、地山整形後、粘性の強い褐色土と硬質の黒色土の互層によって、土墨基部の平坦面を形成している。けれども、土墨上部の盛土においては(1)軟質でやや粒子の粗大な明褐色土を芯土としていること、(2)封土の中央部は水平に積み上げ両側面では一定の傾斜角で盛土する作事（Trench-1 西壁）、(3)土層を交互に傾斜させて張り合わせる「築出」的作事（第３次調査のTrench -2）など、土墨B独自の築墨技法も認められた。

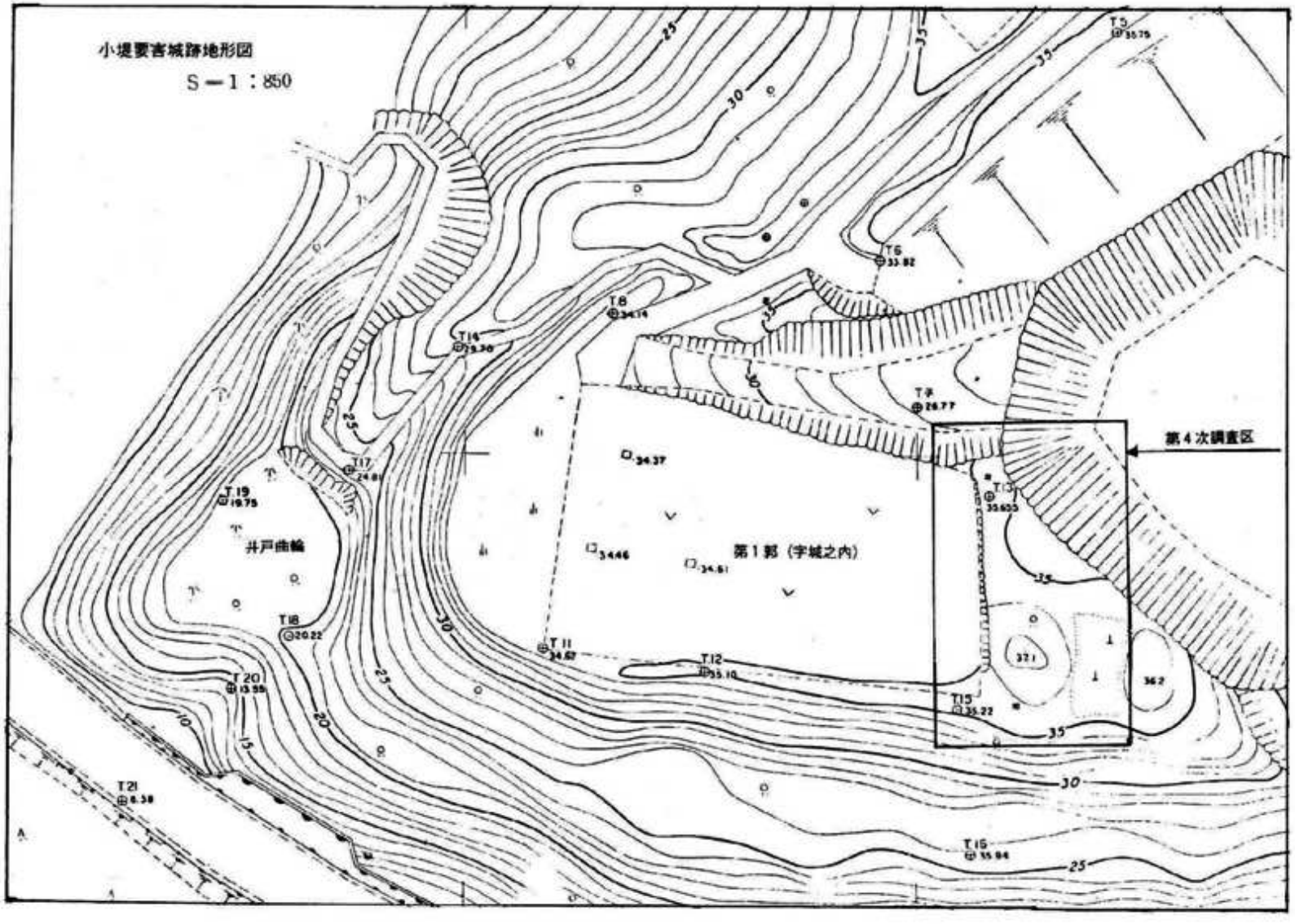
中世城郭の場合、土墨築造には曲輪の外側に設けられた空堀の揚土を利用するのが普通であり、土墨と空堀の断面法量が一致する例が多いといわれ、土墨の法量を計測して埋没した空堀址の旧状復元を試みる研究者もいる。けれども、実際に土墨を発掘調査してみると、単に空堀の揚土や郭内表土の利用だけでなく、かなり遠方から運搬されたとみられる土砂を使用している場合が多い。事実、小堤要害城跡の土墨基底部を形成する黒色土層は台地上には存在せず、明らかに泥湿な低地の土壌である。また土墨の構築技法にしても、決して単一工法によるものではなく、作事現場の自然条件や施工目的など総合的な条件設定の上から技法が選択されたものと考察される。以上、若干の問題点を提起して、第４次調査の概報としたい。

最後に、調査実施に際して御指導・御協力を賜った多くの方々に対し、深甚なる謝意を表する次第である。

（文責・伊藤一男）

小堤要害城跡地形図

S－1：850



《付　記》　昭和47年以降、本遺跡の緊急調査は4次に亘るが、〔1〕遺跡の位置と環境（地学的・史学的）〔2〕台上遺構の計測調査、〔3〕築城の歴史的意義などについては、下記の文献に詳しいので参照して下さい。

●伊藤一男他「小堤要害城跡調査概報（第1次・第2次）」（『横芝町文化財総合調査報告書』第1集・昭49）

●伊藤一男他『千葉県山武郡横芝町・小堤要害城跡（第3次）』（横芝町教育委員会・同町文化財審議委員会・昭53）

●伊藤一男他『小堤要害城跡の研究』（武射史学叢書2・千葉県中世遺跡調査会編・武射史学会出版事務局刊・昭53）

昭和53年6月10日

小堤要害城跡調査報告書

―第Ⅰ郭土塁状遺構に関する発掘調査の概報―

編集者　小堤要害城跡調査団

発行者　日新商事有限会社

印　刷　山武印刷株式会社